
『鬼』一族の伝説

神崎慧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『鬼』一族の伝説

【Nコード】

N9320J

【作者名】

神崎慧

【あらすじ】

『鬼』一族。かつてそう呼ばれた彼らの、少し悲しい物語。どうか最後まで見届けてあげてください。

第一話【全ての始まり】

「知ってるかな？ この辺りには、昔から伝説と呼ばれるモノがあるってね……」

『鬼』一族。

それは、この辺りに昔から伝わる言い伝えだという。

その頃、この辺りには人間じゃなくて、『鬼』と呼ばれるモノ達が生活していた。

そのモノ達の頭には、決まって角が生えていたという。

そのモノ達は争いを嫌い、争いばかりの人間から逃れ、この辺りに村を作って、平和に暮らしていた。

大人達は朝早くから田畑の世話をして、子供達は毎日元気に遊びまわっていた。

そんな村だからこそ、笑い声が途切れることはなく、楽しく暮らしていた。

しかし、その平和はあっけない終わりを迎えることになる。

……人間だ。

ある日の朝、人間が攻めてきたのだ。

争いを嫌う『鬼』達がちゃんとした武器を持っているわけもなく、まず、男達がどんどん殺されていった。

女達はいえ、1人を数人で押さえて無理矢理犯し、さんざん遊ばれた後に殺された。

老人や子供達にも容赦することなく、簡単に殺された。

逃げるモノすらも追い、人間達は笑いながら、楽しそうに殺していった。

半日もしない内に村は壊滅した。

そこら中に死体が転がり、真っ赤な血が飛び散っていた。

人間は次々とやってきてその土地に新しい村を作った。

「……それがこの辺りってわけ。どう？ 怖い？」

「……怖いものにも、この話はまだ終わってないだろ？
それだけなら伝説にはならないからな」

「さすがだね、双夜君。そう、この話はまだ続くのよ」

第二話【伝説は始まる】

「そう。この話はまだ続くのよ」

『鬼』一族を殺し尽して、人間が暮らし始めたその村には、『鬼』一族の呪いが残されていた。

その村で生まれた子供の頭には、例外無く角が生えていたのだという。

……もちろん最初の頃は、『供え物』として殺されていったが、生まれてくる子供の数が増えると、殺していくわけにもいかなかった。

子供を殺された親が増えるという事は、反対運動をする人が増えるという事だから。

反対運動が手に負えなくなってきた頃、村長は苦渋の決断をすることになる。

「子供を産んではならない」

……そのルールが決まると、村人も出来るだけそれを守った。当たり前だ。産まれても殺されるだけなのだから……。

それから数年の月日経ち、村人の誰もがこの村は平和になったのだと……、そう思った。

しかし、話はそんなに簡単じゃない。

ルールを破る者というのは、どこの世界にも必ず居るのだ。

……そして、この小さな村にも、そんな人が居たのである。子供を隠れて産み育てた人が……。

「……その子の名前は神谷ミク。未来って書いてミクと読むの。彼女の両親は、彼女に変えてほしかったのかもしれないね。この村の未来を……。そして、この話は彼女を中心にして大きく回り始める

ことになる」

「……やつと本題、って訳か」

「そういうことになるかな？」

「まあ、ここまで聞いたんだ。最後まで聞いてやるさ」

「うんっ！ それでこそ、双夜君だよ。じゃ、話を進めるよ」

第三話【崩壊する日常】

「じゃ、話を進めるよ」

彼女……、ミクは物心ついた時には山小屋で、たった一人で暮らしていた。

朝昼夜には母親がご飯を持ってきたけど、その他の時間は一人で過ごしていた。

そうしてミクは時間の流れるままに成長していった。

その間に母親から様々なことを教えてもらった。言葉や料理、他にも生きていくために必要な知識を……。

そして、彼女が14才になったある日の朝のことだった。今までは毎日欠かすこと無く来てくれていた母親が来なかったのだ。

おかしいな、と思いながら、森に入り、母親から教えてもらった食べられるキノコや山菜を探し、山小屋に戻って、簡単に料理して食べた。

そんなことが数日続いたある日、ミクはついに村に行ってみることにした。

今までは母親に禁止されていたために、一度も行ったことがなかったのだ。

ミクにとっては、母親が直接会ったことのある唯一の人間だった。……そんな人が来なくなったのだから心配になったのだらうと思う。

「……だけど、それが間違いだったの。彼女が村に行ったとき、母親と、もう一人の誰かが吊るし上げにされていたのよ」

「……誰かっていうのは父親、か……」

「そう。だけど、彼女は知らないのよ。その存在も……」

「母親が唯一知っている人間、だもんね」

「彼女の父親は留守番役だったのよ。母親が出掛けたのをうまく誤魔化すためにね」

「……それで、どうなったんだ？　これで周知の事実になってしまったんだろ？」

「……そうね。それじゃ、話を再開しましょうか」

第四話【閉じられた未来】

「それじゃ、話を再開しましょうか」

吊るし上げにされた母親を見たミクは呆然と立ち尽くした。

「お……、お母さん……？」

ミクを見た村人達はざわめき始めた。

居るはずのない……、違う。居てはならない、頭に角を生やした子供。

少女と女の間くらいの歳に育ったその子供が、村人に戸惑いを与える。

ミクは、呆然とした瞳から涙を流すと、その場に倒れて、そのまま気絶した……。

気が付くと、壁に背を向けて座った姿勢で、手が頭の上で縛られ、動かすことができなかった。

暗い部屋に、閉じ込められたのだと分かるのに、しばらくかかった。

「……ここは、どこ……？」

思わずポツリと呟く。

誰に尋ねたわけでもない。……敢えて言うなら、自分自身への問いかけだった。

しかし、期待しなかった答えが、暗闇から聞こえてきた。

「……気付いたのか、新入り？」

「……誰？」

「おいおい……。人に名前を聞くときは自分から名乗るものだ、って教わらなかったのかよ？」

「むう……。……私は神谷未来。ミライって書いてミク。……あなたは？」

「俺は逸見マサキ。シンのクサリのキボウと書いて真鎖希だ」

「……彼は3年前、12才の時に見付かって、監禁され続けたの」

「……監禁？ 殺されなかったのか？」

「殺さなかった？ 違うわ。殺せなかったのよ……」

「……殺せなかった……？」

「そう。……色々な意味でね。そして、死んだことにして監禁され続けているの」

第五話【明かされる真実】

「……殺せなかった……？」

「そう。……色々な意味でね。そして、死んだことにして監禁され続けているの」

「色々な、意味？」

「マサキが見付かった3年前……」

マサキは、3年前に村人に見付かり、村長と数人の村人が見ている中で殺されようとしていた。

そんな時でもマサキは取り乱すこと無く、ゆっくりとした口調で話し始めた。

「……なあ、『鬼』の本当の意味を知ってるか？」

「本当の意味、じゃと……？」

「やっぱり、知らないのか……。元々『鬼』は存在しなかった。……普通の人間だったんだ」

「普通の人間？ 何をバカなことを……。ヤツラは角を生やした《人でないモノ》じゃ」

「……ハッ。お前等がそれを言えるのか？ 実際、俺は普通の人間である夫婦から産まれたんだぜ？」

「……………」

村長はその言葉に口を閉ざしてしまう。

それを見た村人も、黙って話を聞く。

「……お前達が『鬼』って呼んでいる存在は《罪人》。……いや、先祖が償うことのできない罪を犯してしまったヤツラなんだよ」

マサキは淡々とした口調で話した。

それが『鬼』なんだ、と……。

「償うことのできない罪は、子孫に受け継がれていく。角は《罪人》の証。滅ぼされた『鬼』一族はそのためを争いを嫌って逃げてきていたの。……そして、この村の人たちは『鬼』一族の背負ってきた罪と彼等を殺した罪を受け、角が生えている子供しか産まれなくなつた……」

「それが『鬼』、か……」

「そう。そして、彼の話はそれだけじゃなかったの……」

第六話【選択する覚悟】

「彼の話はそれだけじゃなかったの……」

「……罪を犯してしまったら取り返しはつかない。だけど、ちょっとずつでも償うことはできる。『鬼』はそのためにいる」

「……な、何をバカなことを……。そんなものはなんの根拠もない、ただの妄想だ！」

「そう思うのなら俺を殺せば良い。ただし、『鬼』は俺以外にもあと一人だけ残っている。俺を殺せばそいつも殺さなくてはならない。そして、その罪を自分達だけで背負うことになる。……その意味をよく考えて結論を出した方が身のためだぞ」

後は好きにすれば良い、と言って目を瞑って動かなくなった。

「……その後、怖くなった村長達はとりあえず様子を見ることにしたの。……だから、監禁した」

「マサキが生きていることを村人には悟られないように、か」

「そう。そして、彼の言った通り、村にミクが現れた……。その日から毎日村長達は集まって話し合いを続けたの……」

「マサキは知っているの？ 私たちの……呪いの解き方を……」

ミクは閉じ込められてからずっと、食事と寝ているとき以外はマサキと話して過ごしていた。

「……俺はお前が何も知らないことの方が驚きだけだな」

マサキは呆れたように言って、出来るだけ分かりやすいように説明した……。

「……そして彼は自分が知っていることを説明していったのよ」

「……ちょっと待て。何でマサキはそんなことを知ってるんだ？
村人も知らないんだろ……？」

「……あれ？ 話してなかったっけ……？」

第七話【マサキの過去】

「……あれ？ 話してなかったっけ……？」

「聞いてないな」

「……そっか。失敗失敗。……簡単に言うとな、彼には《靈感》があったの。……まだ彼が幼かった頃の話进行しようか……」

……薄暗い部屋。

俺が物心ついたときには、この部屋で暮らしていた。

たまに来る人が食べ物や水を持ってきてくれたし、ちゃんと住みやすいように整えられていたから、別に困ることはなかった。

……それに、話し相手もいたから結構快適だったのかもしれない。

「ねえ、お姉ちゃん。今日はどんな話を聞かせてくれるの？」

「そうねえ……。じゃあ、ミクちゃんのことを話そうかな……」

俺は彼女から色々なことを教わった。

言葉はもちろんのこと、外の世界のことや『鬼』のこと、そして、ミクという名の『鬼』のことを……。

「……と、いうわけ。彼女は滅びた『鬼』一族の一人だったの。元々『鬼』には《靈感》や《知識》が備わっているの」

「《知識》……？」

「《知識》は『鬼』一族では【神の警告】と呼ばれていたわ。彼等が《罪人》であることを忘れないようにする必要があった神によって、産まれる前に《知識》を刻まれる。言い伝えでは歪んでしまうけど、これなら確実だから……」

「それで、彼は《靈感》だった、と？」

「そう。……だけど、ミクだけは特別。彼女はどちらも持っていない」

「…………理由があるのか…………？」

「…………そうね。それじゃ、続けましょうか…………」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9320j/>

『鬼』一族の伝説

2010年10月10日03時31分発行